

木版画 刻画家
竹村 健さん
Ken Takemura



30代より刻版画家として活動、今に至る。百貨店や画廊、ギャラリーにて多数個展開催。テレビ、ラジオ出演、講演など活動は幅広い。アートの祭典「丹沢アートフェスティヴァル」の会長も務める。1956年広島県出身。神奈川県大磯町在住。

H.P.「竹村健の世界」<http://takemura.ssr.jp>

俳優から木版画家へ

— 広島県出身と伺っています。おいたちを教えて頂けますか
1956年生まれで広島県出身です。戦後10年目に生を受けました。両親は被爆体験者です。戦後、言葉にはできないほどの屈辱を受け続け、広島にいられず、夢を追い神奈川に移り住みました。

私は、厚木高校から明治学院大学に進学し、学生時代は「演劇部」。卒業後、劇団「青俳」に入所し、俳優の道を志しました。黒澤明監督の「夢」「まだだよや、山田洋次監督の「キネマの天地」「男はつらいよ」ほか、NHKの朝ドラや大河ドラマにも出演しましたが、京都でのある時代劇の殺陣シーン撮影中に、内臓を損傷する事故に遭い、入院生活を余儀なくされました。生来の、片腎症や、腎臓奇形があり、事ある毎



—どのような想いで作品づくりをしているのですか
「富士山」「ひまわり」「梟」などを描いた作品が多いので、よく「いろいろなモチーフがありますね」と言われるのですが、よくモチーフに対するこだわりはありません。生涯のテーマは「生きる」。好きな言葉は「今日は、この先の人生のはじまりの日」です。

生涯のテーマは「生きる」

—どのような想いで作品づくりをしているのですか

いません。強いコンプレックスと向き合った時期もありますが、バッショーンは誰にも負けません。そして、作品はあくまで個人の内面の投影である、と思っています。子どもの頃、父に習い事をせびると、「習うものじやない。自分でやれ!」と言われましたが、今は父のその言葉の意味がよくわからります。

誰でも、明日の我が身はわかりません。3・11の大震災以降、いまこの時を大切に、生命の煌めきと喜び、感謝の心を原点に制作したい。そんな想いが一層強くなりました。
日本は、理不尽で納得できないニュースが多くますが、そんな出来事に対する「怒り」のエネルギーを、「生」へのエネルギーに転換して、別の次元で表現していかたいと思っていきます。芸術家という意識はなく、表現者の方がしつくりきます。人生の最期は、自分に「はい、オッケー!!」とGOサインを出せるよう、生涯、制作に携わって生き抜くつもりです。

—現在の活動と今後の予定について教えてください

毎年「親子展」を開催し、2018年で20回を迎えるました。現在父は91歳、回を重ねることに、父の生きがいとなり、多くの方に作品を見て頂くのを楽しみにしています。
作品は、肩書きや受賞歴等に左右されず、自分が良いと思うものを素直に信じて、感じる事が大切だと思います。好きな作品が部屋にあるだけで化学変化が起きて、空気が変わります。日本は芸術に対する理解が少なく、ハードルを高く設定してしまいますが、垣根を取り払い、日常の中

にアートを取り込む楽しさを知つて頂けたら嬉しいです。そんな意図を持った「丹沢アートフェスティヴァル」は12年目に突入。また、日本各地の百貨店、銀座ギャラリー、地元湘南にても個展予定がござりますので、御来廊頂けたら、ありがとうございます。

(取材・文 渡辺里佳 撮影 中村彭宏)